

風車

紀州の歴史と文化の風

文化財センター季刊情報誌【かざぐるま】

2012 夏号 **59**

公益財団法人 和歌山県文化財センター

特集 和歌山城跡の発掘調査



調査地から本丸を望む

特集 和歌山城跡の発掘調査

今回の調査地は、和歌山城と内堀を挟んだ東側の、和歌山市二番丁に所在しています。調査地を含む三の丸は内堀と外堀の間にあたり、江戸時代には家臣の屋敷が建ち並んでいました。

発掘調査は、和歌山地方・家庭・簡易裁判所の新営工事に伴い、平成二十三年七月十四日から平成二十四年二月二十九日まで実施しました。調査面積の二七六〇㎡を三つの調査区に分けて調査し、十一世紀（平安時代中期～後期）から十九世紀（江戸時代末期～明治時代前半）までの五つの遺構面を確認しました。

第一～第三遺構面では主に江戸時代の遺構を検出し、武家屋敷に伴う建物や塀の柱穴・礎石、石組の井戸・暗渠（埋設排水溝）・柵状遺構、屋敷地境界施設等を確認しました。石組の井戸や暗渠の構造などから、井戸から取水し、暗渠で内堀方向に向けて排

水していたという、当時の水利機能が明らかになってきました。調査区1・3の第二遺構面では焼土坑を検出し、調査区3の土坑（①）は東西約九・五m、南北約五m、深さ約一・四mと大規模なもので、焼けた瓦で埋められていました。これらは、明暦元年（一六五五）に起こった大火災の片付け跡と思われます。

建物や塀の柱穴には、柱を固定するため、多量の瓦が埋められているものもあり、城の主要な建物に葺かれていたと思われる、三葉葵紋の鬼瓦片などが出土しています。和歌山城や城下は、数度火災に見舞われており、それを裏付ける成果となりました。また、調査区の縦横に検出した土地境界施設により、絵図で認識されていた武家屋敷4区画の、正確な配置を確認することが出来ました。廃棄土坑には少量の動物の骨の他、多くの牡蠣やシジミの貝殻が捨て



調査区3 第3遺構面全景（東から）



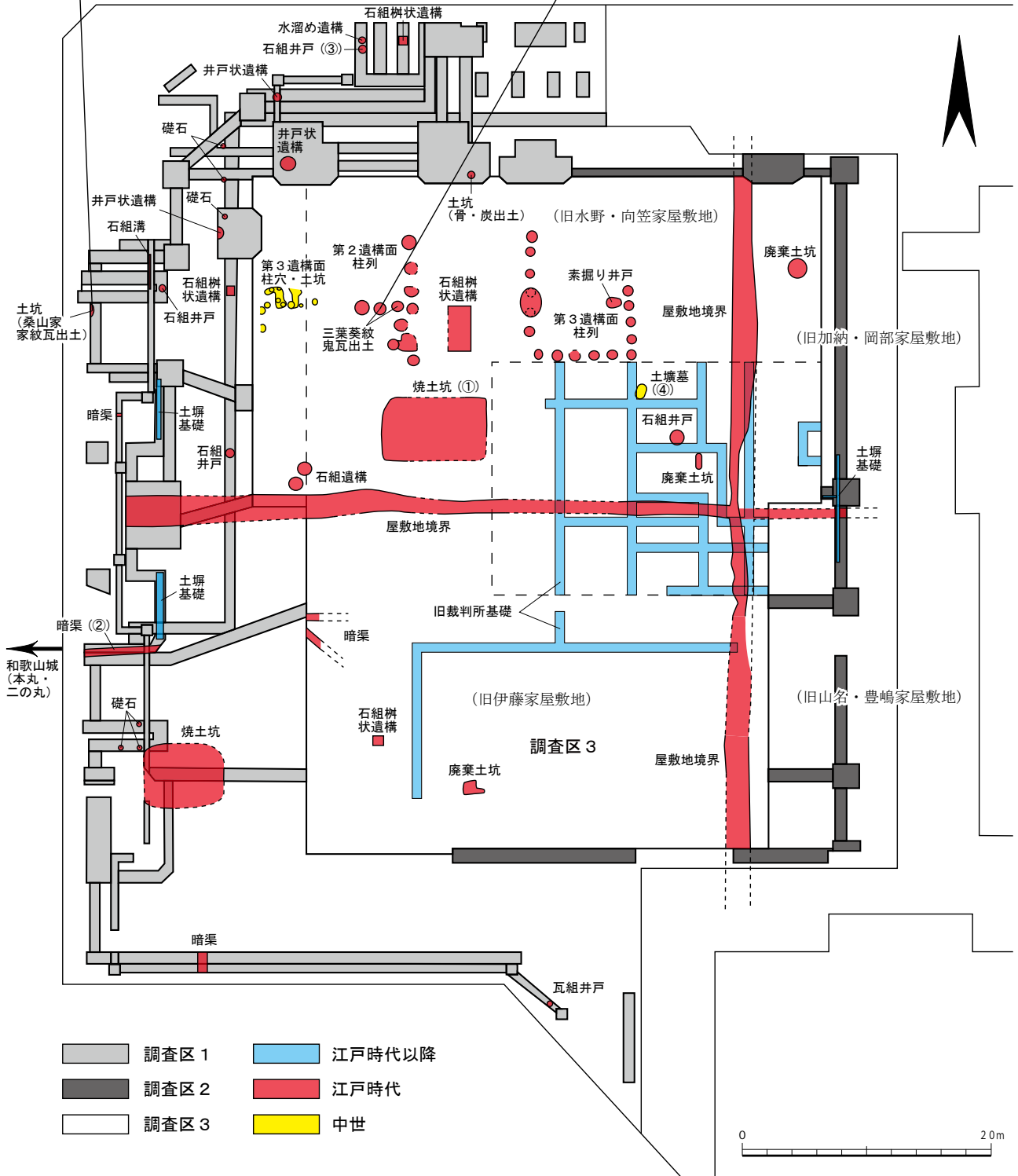
調査地の位置（S=1:15,000）



桑山家 家紋軒丸瓦 (桔梗紋)



徳川家 家紋鬼瓦 (三葉葵紋)



調査区全体略図 (S=1:500)

られており、当時の食生活の一端を窺うことが出来ます。

第四・第五遺構面では平安時代から室町時代にかけての遺構を中心に確認することが出来ました。各遺構面で多数の土坑やピットを検出しましたが、いずれも遺物は少量しか出土していません。この地域がたびたび洪水の被害にあっていることも、原因の一つであると考えられます。その中で、調査区3の第三遺構面で、比較的残りの良い土壙墓(④)を検出しました。手足を折り曲げた屈葬という方法で埋葬されて



調査区1 江戸時代の暗渠(②) (東から)



調査区1 江戸時代の石組井戸(③) (南西から)

おり、頭部を北にして、左手首周辺に数枚の銅銭が副葬されていました。

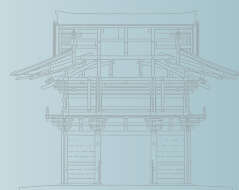
今回の調査では、江戸時代を中心として、幅広い時代の遺構・遺物を確認出来ました。江戸時代の遺構からは、当時の城下町整備の様相や生活を垣間見る事の出来る資料が多く見つかっています。また、江戸時代に先行する安土桃山時代の桑山家の家

紋の入った軒丸瓦や中世の土壙墓を含む遺構・遺物の存在は、城下町建設前の状況を知る貴重な資料となりました。江戸時代以降でも、明治十九年に建設された旧裁判所の建物に関する遺構や、第二次世界大戦後の整地土坑等が確認出来ました。これらにより、各時代の遺構は大きく削平を受けていますが、これもまた和歌山県の歴史の一部であり、過去の歴史の上に生活していることを実感させる成果と言えるでしょう。

(森原 聖)



調査区3 中世の土壙墓(④) (南から)



熊野本宮大社での文化財建造物保存修理

田辺市本宮町本宮の熊野本宮大社では、平成二十二年六月から二十二箇月をかけ、重要文化財である第一殿・第二殿、第三殿、第四殿の三棟の屋根葺替を中心とした保存修理工事を行い、今年四月には優美な桧皮屋根の社殿が揃って姿を現しました。

本誌五十二・五十五号でも紹介してきましたが、現在の社殿はいずれも江戸時代後期に大齋原おおのほらに建てられたもので、明治二十二年（一八八九）の水害を受けて明治二十四年（一九一）に高台の現在地へ移築（遷座せんざ）されました。大齋原では、上四社・中四社・下四社で構成されていましたが、上四社にあたる三棟だけが流出を免れました。当時の被害の様子は、県立博物館企画展「災害と文化財」でも紹介されています。

今回の修理期間中には昨年九月の台風十二号の被害で工事を一時的に中断しまし

たが、全体的には順調に進み、当初予定よりも早く竣工を迎えることができました。工事は桧皮屋根の葺き替えとそれに伴う屋根下地の補修を行い、あわせて軒まわりや縁まわりの修理も実施しました。

今回工事で判明した三棟に共通する特徴としては、桧皮屋根の下に杉の手割り板を用いた板葺きの野屋根のやねが設けられていたことです。宮殿くうでんが安置される身舎部分は、二

重の屋根で覆われていることとなります。これらの小屋組は、明治移築時の施工がそのまま残っていました。

熊野本宮大社では、今年には正遷座百二十年にあたり、さまざまな記念行事が行われます。また、社殿を囲む鈴門すずもん・瑞垣みずがきや、その前に建つ神門しんもん・築地塀つじべいなど、史跡地内の建造物の修理計画もあり、境内の整備を進めていく予定です。（下津健太郎）



写真1 竣工状況

修理を終えた3社殿を瑞垣越しに見る。昭和43年（1968）の屋根葺き替え以来44年ぶりに優美な桧皮屋根の姿が戻りました。



写真2 第一殿・第二殿の小屋組状況

小屋組の下には板葺きの野屋根が存在していました。写真で見る小屋組は、120年前の移築時の施工がそのまま残っていました。

和歌山文化財百景

歎喜寺下品堂

— 小さなお堂は歴史の増嶋 —

有田川町金屋、蜜柑畑を縫うように走る県道沿いの土塀越しに、古びた瓦が葺かれた小さなお堂が見い出せます。歎喜寺下品堂。少々かわった名を持つこの建物、簡素な外見とは異なり内部は様々な意匠で飾られます。高野山の文化息づく有田川流域では、室町時代の建物の細部に禅宗の様式を取り込む特徴が見い出せますが、江戸時代に建てられた下品堂では様々な虹梁しこうりょうを組み合わせて豪快な内部空間をつくりだし、細部には独自の意匠を加えるなどさらに自由闊達さが増しています。

町指定文化財である下品堂は、雨漏れやシロアリ被害が見られたため平成二十二年度に修理工事が実施されました。必要最小限の施工でありましたが、当センターも町教育委員会と協調して調査を行い、小屋組から発見された棟札により江戸時代中期である延宝二年（一六七四）の建立であることが確認出来ました。一方屋根の鬼瓦には鎌倉期のもの一枚、室町期も三枚使われていたほか、平瓦や丸瓦にも建物の建立より古い中世の瓦が多量に認められました。その経緯は不明ですが、当地の出身である明恵上人を忍びその高弟喜

海が歎喜寺を再興したのが鎌倉時代であったことを想うと、古材の再利用には何かしら意図的なものが込められていたのかもしれない。

また、下品堂の柱には現在の建物とは関連しない貫穴などの痕跡が見え、これも古材を転用したものと考えられます。材の特徴から地元につながる中世山城の古材である可能性は少なそうですが、下品堂の建立を命じた徳川頼宣が、藩内各地で古代や中世に遡る古刹を再評価し、積極的に整備していったことを踏まえると、当時の歎喜寺の位置づけが窺われます。今回の修理では建物の歴史を尊重し、瓦の他木材等も可能な限り再利用出来るよう努めました。

気になるのは下品堂の名の由来。境内より山に分け入ると上品堂、中品堂があることから、浄土教の九品の阿弥陀如来像を祀る信仰の形態を今に伝えるものであることがわかります。しかし江戸時代後期の『紀伊国名所図会』では、現在の本堂の位置に描かれた建物に下品堂の名が付けられているのです。延宝の棟札にも建物の名前は記載されています。一体この建物の正体は？全てを知るのには、今も屋根の上に座る鎌倉時代の鬼瓦だけ、なのかもしれません。

(多井 忠嗣)



大虹梁など禅宗の様式を基調に構成された内部空間



修理後も現役で屋根に鎮座する鎌倉時代の鬼瓦

匠という言葉があります。プロフェショナルです。文化財建造物の解体修理は、匠集団が知恵を結集することにより成り立ちます。親方から技法を受け継ぎ、さらに創意工夫を加えて自らの技術とした大工、建具職人、ひわだし 桧皮師、瓦師、さかん 左官、いしく 石工などです。気候・風土など地域の特徴により育てられ、豊かな知識と経験、バランスのとれた技術を持つ技術者集団です。

この職人集団と共に手順を組み立て、重要文化財、その中の国宝の修理工事を設計監理し、技術指導を行うのが、当センター文化財建造物課の技術者なのです。総合的に指揮をとる技術者と言えるでしょう。例えば昨年度では、国宝の長保寺をはじめ、重要文化財の金剛三昧院、熊野本宮大社、熊野那智大社などで修理工事の技術指導を行いました。

日本の伝統文化の一分野、文化財建造物の世界を今後紹介していきます。
(渋谷高秀)



桧皮師の仕事



大工の仕事

きのくに歴史小話

～きのくにれきしこぼなし～

発掘屋余話 ⑱

き・きまちがい

先日から、我家の庭先にあるウツギが花をつけ始めています。純白の清楚な花（卵の花）ですね。これで、ホトトギスの声でもすればまさに「夏は来ぬ」というところでしょうか。

ところで、このウツギは、可憐な花に似合わず、木質部は非常に筋力のある強い木で、昔から木釘として使われますね。

言うまでもなく、木はその特性に応じた用いられ方をします。たとえば身近なところでは、桐は箆たんすもしくは下駄という用途が多いですが、これは耐火性に優れていること、軽いという利点を生かしていることでしょうね。発掘の関係で言うと、古墳時代の棺ひつに（割竹わりたけ型木棺）というのがあります。これは西日本ではほとんど高野槇です。水に強く、腐食しにくいことから古くは船材や橋にも使われますね。

さて、良材に恵まれ、古くから木の文化が発達したと言われている和歌山で、一昨年、弥生時代前期に遡る木製品が多量に発見されました。（すさみ町・立野遺跡）

鍬などの農耕具のほか船形をした特異な容器など種類が多く、完成品のみならず未製品のものもあることから、木器生産の工房跡であった可能性が考えられています。考古学的には一級の資料となるもので、それだけにこの整理に期待があつまっているところですが、いよいよこの春から本格的な整理作業に着手しました。樹種同定をはじめ、木の専門家の指導もいただきながら進めていく予定です。先日も整理事務所を訪ねたところ、担当者と作業員の皆さんが木製品を洗ったり、新しい水槽に移し変えたりと基礎作業に汗を流してくれていました。

担当者に「がんばってよ」と声をかけたところ「キが重い」との返事。一瞬「気」に聞こえたけれど、まさかねえ。木・気間違いということにしておきましょう——。

(村田 弘)

催し物案内 和歌山県内の文化財関係イベント情報 (2012年 夏～秋)

(公財) 和歌山県文化財センター

- 地宝のひびき－和歌山県内文化財調査報告会－ 2012年6月24日(日)
- 歩いて知るきのくに歴史探訪「慈尊院周辺と町石道」(仮) 2012年10月20日(土)

和歌山県立紀伊風土記の丘

- 夏期企画展「古墳時代の^{うつつは}宇都波」 2012年7月14日(土)～9月2日(日)
- 古墳公開②「風土記の丘の古墳見学会～大日山35号墳とその周辺～」
2012年10月6日(土)
- 特別展「紀伊弥生文化の至宝」 2012年9月29日(土)～12月2日(日)

和歌山県立博物館

- 企画展「箱と包みを開いてみれば－文化財の収納法－」 2012年6月9日(土)～7月16日(月)
- 企画展「きのくにのむかしばなし」 2012年7月21日(土)～9月2日(日)
- 特別展「よみがえる軍艦・エルトゥール号の記憶」 2012年9月8日(土)～10月11日(木)

和歌山市立博物館

- 特別展「華岡青州の医塾春林軒と合水堂」 2012年7月21日(土)～8月26日(日)
- 特別展「ヘンリー杉本とその時代」 2012年10月20日(土)～11月25日(日)

高野山霊宝館

- 特集陳列「越前丸岡藩主 本多重昭の奉納品
～重要文化財から羊の角?まで～」 2012年4月28日(土)～7月8日(日)
- 夏期特別展「清盛時代の高野山」 2012年7月14日(土)～9月23日(日)

目次

- 1 表紙 和歌山城跡調査地から本丸を望む
- 2 特集「和歌山城跡の発掘調査」
- 5 文化財建造物課 短信「熊野本宮大社での文化財建造物保存修理」
- 6 和歌山文化財百景「観喜寺下品堂― 小さなお堂は歴史の垣塙 ―」
- 7 きのくに歴史小話「古建築修理の逸話 ① 紀州の匠集団」「発掘屋余話 ⑱ き・きまちがい」
- 8 催し物案内

(公財) 和歌山県文化財センター 連絡先一覧

風車59 (2012・夏号)

平成24年6月30日発行

(公財) 和歌山県文化財センター

URL <http://www.wabunse.or.jp>

【事務局】

〒640-8404 和歌山市湊571-1
TEL 073-433-3843
FAX 073-425-4595
maizou-1@wabunse.or.jp

【埋蔵文化財課分室】

〒640-8345 和歌山市新在家61-4
TEL/FAX 073-472-3710

【文化財建造物修理事務所】

◎金剛三昧院保存修理事務所
〒648-0211 伊都郡高野町高野山425
TEL/FAX 0736-56-5578

◎長保寺保存修理事務所

〒649-0164 海南市下津町上685
TEL/FAX 073-492-3260